～ 比田井天来が考えた臨書 ～

漢字は今から３０００年以上昔、中国で誕生しました。漢字はやがて日本へ渡り、「かな」が誕生します。長い歴史の中で多くの名人たちが書を書きましたが、特に優れた書は「古典」として今に伝えられました。歴史のふるいにかけられた名筆の数々。これらの「古典」を直接学ぶのが「臨書」です。

ではなぜ「臨書」をすすめるのでしょう？

実用書はとにかく、いやしくも趣味としてまた芸術として書を学ぶ者は、先生につくのもよいが、先生の流儀に固着してしまってはよくない。先生についても、その将来の手本とするものは古法帖および古碑帖でなければ大成することはできない。（比田井天来「書の趣味」１９３４年）

まず、ここに「実用書」と「趣味とし、また芸術として書を学ぶ」という二つの表現があることに注目しましょう。「実用書」とは日常生活の中でじょうずな字を書くこと、「趣味とし、また芸術として書を学ぶ」とは「作品として価値ある書を書くこと」を意味します。つまり後者は、将来「古典名品」として残るような優れた書であり、これこそが書を学ぶ目的だと天来は考えたのです。

ではそのために、先生の手本を学ぶことは有効でしょうか？先生の手本を学ぶと、先生の流儀をまねた弟子が誕生します。そしてその弟子が先生となって教えた弟子は、さらに偏った流儀をまねるようになる。書の芸術的な価値は下落の一途をたどることになるでしょう。そうではなく、古典名品を直接自分で学べば、さらに先生の筆法にとらわれることなく、誰もが書の大家になる可能性が生まれます。さらに、古典の中には雄大な文字や繊細な文字、スピード感あふれるものやゆったりと落ち着いたものなど、変化に富んだ表現があふれています。これらすべてを学び尽くし、あらゆる表現技法を身につければ、まねではない、過去の誰も書くことのなかった独自の書が書けると天来は説いたのです。

わたしは小学校に入学したころから、法帖および碑版から書を習っていた。碑版や法帖は、けっして初学者の近寄れないような難しいものではないのである。初学のさいに悪い手本を習うと、その癖を改めるのにおおいに骨がおれるから、はじめから最上の手本について学ぶことがもっとも肝要である。

手本はどういうものを選ぶかというと、わたしは第一に古碑版および法帖を挙げたい。碑版というのは石搨（拓本）のことで、法帖とは書の手本にするために刻したものである。

書の模範になるものは中国では唐以前、日本では三筆以前のものがもっともよろしい。三筆とは嵯峨天皇・弘法大師・橘逸勢の書をいう。楷書では唐の四大家といわれる虞世南・欧陽詢・褚遂良・顔真卿などを範とすべく、行書では、晋の王羲之の「蘭亭序」、同じく王羲之の「集王聖教序」など、草書では、唐の孫過庭の「書譜」などもよいが、なるべくは王羲之の「十七帖」などをもって手本とすべきである。

中国人の書でも、宋以後の書はいちじるしく下っているから、模範にならない。ことに初学の人は、後世の偏した書風を学ぶことはこころして避くべきである。新しい時代のもののうちにもよいものもあり、参考として役立つものも少なくないが、それは古碑帖について十分習うなり、鑑賞眼を作るなりしてから、第二段に参考とさるべきものである。（比田井天来「書の趣味」１９３４年）

先生の筆法を身につけるのではなく、逆にこれを否定し、自らの目だけをたよりに臨書を続けて、先生とは異なった独自の世界を切り開くこと。これこそが天来が実行し、弟子にも望んだ書の学び方でした。自らの主催する「大日本書道院」展において、自らと似た作品を賞からはずしたという事実は、この主張の真剣さを物語っています。天来が主張した「臨書」とは、同じ筆法によって団結する「流派」を否定することでもありました。

ああ、流派はなんと我が文明に害毒を与えてきたことだろう。いまこそ従来の弊害を打破し、書道研究の一大革新をはかる時だ。（比田井天来「書学院建設趣旨書」１９１９年）

一つの流派に所属し、その型にはまった作品を書くことを、天来はもっとも嫌いました。すべての人が個人となって「古典」という大海に泳ぎ出て、型にとらわれることなく、書の本質を追究することを、天来は願ったのです。